



市民がつくるまちづくり情報誌

コミュニティくさつ

2012年
夏号



オヤジが
カッコいい街は
いい街だ!

退職後の街とのつながり方

初夏の山寺・馬場で茅葺小屋。どこか懐かしい日本の原風景にホッとする(写真・大條紘史)

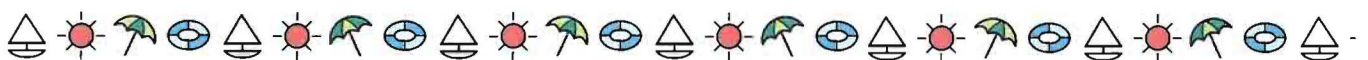
今号のイラスト

絵：大村恵



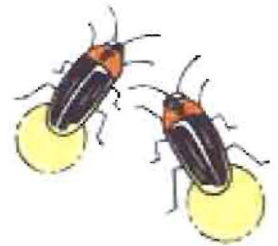
もくじ

- ② 定年後はなんでも遊びの延長 鈴木道弘さん
- ③ いつか、この池にホテルを飛ばそう! 藪内博文さん
- ④⑤ おやじがカッコいい～街 かがやきの丘 おやじの会
- ⑥⑦ その森には“三匹のおっさん”がいた
波多野衛さん・水野光治さん・宮本真一さん
- ⑧⑨ ゆっくり草津街道物語⑩
洪水と雨乞いと…水と生きた街 山寺・馬場
- ⑩ 俳句散歩「夏」
- ⑪ 鳥の眼とまちの芽① オオヨシキリ
- ⑫ 熊谷栄三郎の徒然草津⑦「草津のパワースポット」



定年後はなんでも遊びの延長

草津でホタルを楽しむ会 鈴木道弘さん



私の実家は東京のど真ん中、新宿です。今では近くに東京都庁が建っています。子どものころは新宿にもホタルが飛んでいたんですよ。

近くには浄水場があって、そこから用水路も流れてた。トンボやヤゴを捕まえて遊んだし、富士山や丹沢の山だっただけ見えたんです。

空が広がった。その後の高度成長で山が見えなくなりました。ビルが建って空も切り取られちゃいました。

当時、僕の地域では「住宅地の中に4車線道路ができる」って言うので問題になっていました。当初、「便利になっていいなあ」ぐらいの気持ちだった僕も道路委員会に参加して、環境や騒音・安全など、僕が気にもしてなかった意見があつて「色々な考え方があつた。僕も地域のことを考えなくてはいけないな」と思ったものです。

ついに会えた…
たった1匹のホタル！

そこで出会った地域の仲間たちと道路の清掃活動を始めると、地域の自然環境に関心を持つようになりまし。鳥や草花、琵琶湖にくる「ハクチヨウ、道端にひっそりと咲く草花にも気づくようになりまし。

その後誘われて入った淡海生涯カレッジは、今一緒に活動している多くの仲間と出会えるきっかけになりました。そこで琵琶湖の環境やホタルの話を知りたりして…。それで「近くを流れる」葉山川には、ホタルが飛んでるのかなあ」と何気なく思ってた、夜の散歩を始めました。

「会社がすべて」から「地域デビュー」

結婚して子どもが生まれたころ、「自然と触れ合える所に住みたい」という気持ち強く、友だちを頼って思い切って滋賀に引っ越してきました。こちらに来て「会社がすべて」の生活でしたが、普段の生活で山や川が見えるし、車で山際を走ると「あつ、山やー森やー」と感動したものです。

定年間近になって、地域の役員がまわってきたんです。寝に帰るだけのまち、隣に住んでるのがどんな人かさえ知らなかった僕にとって、初めての地域とのつながりでした。

地元の人に尋ねたりすると「昔は飛んでたんだけどねえ」なんて返事をもらいながら、夜は夜な歩いてきた6月の初め、ついにホタルに出会えました。ふくわ、ふくわと飛ぶたつた1匹のホタル。ホントにうれしかったですね。それまで守山に見に行ったりしてたけど、やっと探しあてた1匹だもの、感動が違いました。

この感動を仲間に伝えたくなつたし、ホタルが飛び交う環境を守りたいと思つたようになりまし。「草津でホタルを楽しむ会」の誕生です。

ホタルを嫌いな人つて会つたことがないんです。あの光を見ていたら、おじいちゃん、おばあちゃん孫との語らいも弾むような気がし。ホタル



草津でホタルを楽しむ会の鈴木道弘さん。子どもたちにホタルの折り紙を教えている様子は本当のおじいちゃんと孫みたいです。

いつか、この池にホタルを飛ばそう

ルがそこにいることで、親子や家族の交流につながってほしい。

野洲の中の池川にホタルを見に行った時、おじいちゃんや孫がホタルを探している姿を見て、「このうのがいいなあ」って思ってた。

会の名前を「守る」でなく「楽しむ」にしたのも、ホタルから人を遠ざけて守るのでなく、もっとホタルと寄り添って欲しいから…

心まで定年を迎えたくない。

頑固じいさんにはなりたくない（笑）

定年を迎えたとき、いつまでも若いというか、青くいたいなあと思ってました。心の定年は迎えたくない、子どものころのような感性はいつまでも持っていたくなって。頑固じいさんにはなりたくないんです。柔軟に人の意見が聞けたり、学ぼうとしたり、そんな人でいたいと思ってるし、そういう人たちと付き合いたいとも思っていました。

そんなときに始めたこの活動で、多くの仲間ができました。仕事では知り合えなかった仲間たち、こんな楽しい仲間たちと出会えたことは、自分が豊かになっていくなくと実感できるし、恵まれてるって思いますね。

僕にとっては定年後の人生を楽しく学び合える大切な仲間です。仲間や活動の影響でパソコンだっていじるようになりました（笑）。

← 次のページに続く

いつか、この池にホタルを飛ばそう！ 藪内博文さん

浅池の水辺づくりに「草津でホタルを楽しむ会」の面々と一緒に汗を流す中に、地元の人があります。元JR職員の藪内博文さん。現役時代は列車の車掌として、西へ東へと忙しい日々でしたが「乗客とのふれあいが楽しくて、毎日やりがいを感じて仕事をしていました。元々が“しゃべり”なもんやから、私の車内アナウンスは『おもしろい』というて人気がありました」というとおり、人懐っこい笑顔と笑いの絶えない語り口です。



水が始まり水道が普及します。役目を終え人が入らなくなった池は草ぼうぼう、イバラが茂り、地元の人からも池があることさえ忘れられていました。

藪内さんが鈴木さんと出会ったのは地元小学校の環境学習。ホタルのことをとても熱く語る鈴木さんと話をしているうちに、よくホタルが飛び交って

た浅池の昔の情景を思い出しました。そして「またホタルが飛びようになればいいな」と。

今から40年前、「もこり池」と呼ばれていた浅池は、夏にはホタルが飛び交う清らかな湧水が出る池で、地域では生活の水として使っていました。やがて琵琶湖揚

そんな藪内さんの話を聞いた鈴木さんから「浅池にホタルを飛ばそう」と提案。その気持ちに押されて一緒に浅池の整備活動を始めました。藪のようになった池の周辺は不法投棄のゴミでいっぱい。本当に一步一步の作業です。「今に見てろ」という気持ちを支えに再びホタルが飛び水辺づくりに取り組みます。

5年が経った今、徐々に町内会の理解や隣接する病院の支援も得られるようになりました。きれいな見渡せる水辺には子どもたちが遊びに来てくれ、このうれしさも活動の励みに加わりました。ホタルのイサとなるカワニナも池に棲みつきました。生き物にも、人にも親しまれるようになったこの浅池に「少しずつホタルが飛び日も近い」と確信している藪内さんの額には今日も大粒の汗が流れます。



今日もホタルが棲む池づくりに汗を流します。



だから定年後はなんでも「遊びの延長」で良いと思ってます。ホタルの会の活動だって、まったくの遊びの延長。遊び心がないと面白くないし、続かない。おじさんたちがホタルの光を求めて夜な夜な出歩いてるんです（笑）。

地域の人たちと一緒に活動している水辺づくりだって、夏は暑くてしんどいけど、みんなでやるのは楽しいし、何と言っても「ホタルを飛ばす」という夢がある。だから会の活動を社会貢献なんて大層に思ってません。

もし社会貢献と言うなら、こういったおじさん、おばさんが楽しくつながっていく、このつながり自体かも知れないね。

ホタルは「人間の暮らしかた」のバロメーターじゃないか？ってね。

もともとホタルって人の暮らしの近くにいる昆虫なんです。人里近く、人間に寄り添うことで種を保存してきたのではと思うんです。

だからホタルは「環境」のバロメーターじゃなくて、「私たち人間の暮らし方」のバロメーターじゃないかなって思ってます。

ホタルがいなくなったのも、人間が生活の中で水路や川を利用しなくなっただけじゃないかな。もう一度、利用し直すことを考えたら、ホタルも身近になって、その結果、環境も良くなるんじゃないかななんて思います。

定年まで
待てない人
必見!

おやじがカッコいい街

退職してからの地域デビューは、なかなか大変。特に男性は地域とつながるきっかけがなくて難しいようです。新しい住宅地で若いパパたちの心をくすぐりながら、地域とのつながりや仲間づくりを目指すユニークな取り組みをご紹介します。

ここは追分町の「かがやきの丘」。比較的若いパパママ世代の多い約300世帯からなる新しい住宅地。町内会も平成22年にできたばかりです。まだ祭りもないこの町では、自治会館の竣工式に合わせて「第1回かがやきの丘まつり」をしようとする当時の役員さんたちが動き出しました。大人から子どもまで、集い楽しめるものを企画し準備にかかります。たこ焼き・焼きそばなどの出店

や子どものゲームコーナーまで、アイデアがどんどん集まり、前日準備には30人近くが集まっていました。町内会の副会長をしていたMさんは「みんな何かしたい」というエネルギーを持っていて」と感じています。

Mさんは話します。「お母さんは、ママ友みたいな子ども

かがやきの丘おやじの会



三輪車レースで最終コーナーをまわるおやじたち

かがやきの丘 おやじの会

パパ、がんばれ～。
今日のお父さんはいつもよりカッコいい！



を介してつながりができるけれど、お父さんは地域でのつながりがない。それなら「おやじ」を集めて、この「何かしたいエネルギー」を刺激する場をつくれれば、今から知り合いになれるんじゃないかってね。「『かがやきの丘おやじの会』の誕生です。つながりのポイントはママ友同様に子ども、そして「ちょっと一杯」です。

1回目の活動は親子での竹馬づくり、夕方には懐かしの銭湯で汗を流し、自治会館での宴会です。チラシをつくり「おやじの会」の活動に賛同したのは約60組。その後も2カ月に1回ペースで「三輪車レース」「おもちゃつきこいも煮会」「ホワイトデーのケーキづくし」など、パパ心をくすぐるプランです。すべて、おやじと子どもが準備し、お母さんに負担はかけません。そして普段見れない、ちょっとカッコいい(?) おやじの姿も見れるのです。

もちろん、目的であるお父さん同士のコミュニケーションも自然と生まれます。「勤務先はどこ?」「京都です。」「同じや、また京都駅で待ち合わせて飲みましょか。」と、つながっていきま。また話題も地域のことが多くなる。「回覧板に載ってた空き巣の手口って...」こうして防犯や防災といった街の力も自然と強くなっています。

先日、「おやじ農園」が発足しました。約40組が参加しています。農園はなんと住宅地の一角。宅地の土地なので地盤は固く畑の土には遠いので、まず重機で掘り起こして土づくりからのスタートです。「でも野菜が育つ土ってどうしてつくるの?」おやじたちのハテナ?が渦を巻きます。

「ネットで調べて来る」「ホームセンターで聞いてくる」「田舎の親に電話してみる」「〇〇さん、農園の園長ね」...

各々ができることで情報を集め合いながら、畑を紹介したコミュニケーションが生まれます。「そのうち自分たちで作った野菜を使って鍋やバーベキューを」「いやいや地域の中で直売を」「いつか「かがやきメロン」を売り出そう」と夢はふくらみます。ゼロから始める苦労と、ものをつくる楽しみは、みんなが歳を経たときの共通の思い出になっていくだろうとMさんは期待します。今はまさに、その種まきなんですね。

昨年8月に始まった「おやじの会」は一年で会員が60組から100組に増えています。会員募集のチラシは今まで2回だけで、あとは口コミで増えました。イマドキのお父さんたちはケータイが必要品。

「おやじの会の案内や連絡もメールですか。」とMさんに尋ねると、すかさず「メールは個人なので、すぐ消されたり埋もれたりします。紙ならお父さんもお母さんも見るでしょう。お母さんがお父さんに紹介したりもするでしょう。だからアナログだけどチラシをつくって配ります。配るときには子どもたちも楽しそうに手伝ってくれるんですよ。」なるほど、ナットク。

「かがやきの丘おやじの会」はそれぞれを認めあいながらもキュークツさを感じない程良い関係。みんながアイデアを出し合い、『何かしたい。してみたい』と意欲のある人が多いんです。楽しい街にしたい、終の棲家を良くしていきたいとみんなの意識が高まる様子は楽しい」とMさんは話します。そして「おやじたち」の背中を見ながら、子どもたちは多くの楽しい思い出をつくり、「ここを育っています。やがては」ひるさと「の思い出となっていくでしょう。おやじも輝く」かがやきの丘」。

住宅メーカーのCM「あのまに」この家に「ここは帰る 家に帰れば...」と続く町が、ここ草津にありました。



はげ親父かつらで参戦も...もうハットハットです。

その森には“三匹のおっさん”がいた

—平均寿命も延びた現在、六十歳を『おじいちゃん』の範疇に入れられるのは違和感がある。まだまだ、おっさんということにしておいてほしいと葛藤している亭主の心情も知らずに還暦祝いのお話などする妻に、清一は不機嫌になって黙り込んだ—

「三匹のおっさん」（有川 浩 著）の一節です。還暦を過ぎたかつての悪ガキ三人組が自警団を結成し、ご近所に潜む悪を懲らしめる痛快活劇小説として話題ですね。

そんな気持ちの良い「三匹のおっさん」がここ草津にもおられました。いやいや素敵なおじさまたちです。



ここはロクハ公園近く、「さくら坂保育園」の裏山。土手に垂れ下がった一本のロープ、階段のついていないツリーハウス、木の枝を三角に組んだ秘密基地…。「ぼうけんむら」と名づけられたこの森で、子どもたちはどんな笑顔を見せてくれるのか。いやいや私たち大人だってワクワクするそんな森。

実はこの「ぼうけんむら」。わずか1年前は木々がうっそうと茂る暗い森でした。持ち主である保育園の保育士さんたちも「森とは暗いもの」と思っていました。そんな時、松がマツクイムシの被害にあいだし、太田園長が3人の一人、波多野衛さんに相談を持ち掛けたのが始まりです。波多野さんのお孫さんが保育園の卒園児という縁でした。

波多野さんはNPO法人「森の風音」のメンバーとして、別の森でも手入れをしていたこともあり、同じメンバーの宮本真一さんと水野光治さんに声をかけ、少しずつ手入れしながら園児が遊べる里山へと変わっていききました。

3人は木を切り、切った木から遊び道具をこしらえ、植えた苗が花を咲かせる。3人は仲間ですが、それぞれを持ち味で動きます。この森での3人のルールは「自由」。何時から何時までという決まりもなく、強制もありません。時間を示し合わせて集まるのは大きな木を切り倒すときぐらい。

3人も空いている時間が1時間でもあれば「ぼうけんむら」に来て作業をするので、顔を合わせることもなく帰ることだってしばしば。ルールは自由でも、3人の息はぴったり。「森の風音」の活動から学んだ数多くの経験が「ぼうけんむら」で活かされています。そんな3人に聞いてみました。活動のこと、退職後の楽しみ方のコツを。



三匹のおっさんたち。手づくりの木のイスに座って取材です。

宮本真一 さん

とにかく、じっとしていることが嫌いな性格。好きな時に来て、好きな作業をするここの自由さが自分に合ってる。でも足しげく来るもんだから、妻に「自分の孫をみないで、よその孫をみてる」なんて言われていますけどね（笑）。

ここでは、自分が子どものころに遊びの中でした体験を子どもたちにもして欲しいなあと思って作業しています。今は何かあるとすぐに大人の責任が問われますよね。でも子どもは少しのケガや失敗をしながら注意すべきところを自分で気づいていくもの。大人も叱るべきところは他人の子であっても叱るものなんて思っています。



ここへ来て作業後に、一人で鍋をつくってつくくこともあります。自己満足ですが、それがいいんです。ここは私の癒しの場所です。

水野光治 さん

退職してレイカディア大学の園芸科に行きました。妻がガーデニングに精を出すもんだから、せめて花の名前ぐらい覚えようと（笑）。それをきっかけに、いくつかポラン



ティア活動を始めると色々な人に出会います。皆さん積極的ですね。仕事をしているところと違ってフラットな関係、素の自分で付き合うことができるのは心地よいものです。

「ぼうけんむら」は、園児だけでなく、ぼくらの遊び場でもあるんですよ。実はここの一角に「おやじのたまり場的な所をつくりたい」って構想を膨らませてます。

作業中に園児が遊びに来たりすると、「ありがとう」って言うってくれるんですよ。たまりませんね、かわいくて。

波多野衛 さん

私は自然に囲まれて育ちました。夏は川で遊んだり、秋は山で栗を拾ったり…。だからここでの活動は子どものころに戻ったようです。今の子どもたちにはこんな遊び場や木々に触れる体験がとても大切だと思っています。園児たちはここで自分なりに知恵を出して工夫します。時にはちょっとした失敗も。それは危険回避も含めて大人になってからの人間力につながると思うんですよ。電車に乗るとね、通勤している大人たちの顔がみんな辛そうなんです。精神的に余裕がないんでしょうね。可哀そうです。子どもたちにはぜひ人間力をつけてもらいたいです。

私たちの作業はそんな子どもの人間力を養うよう心掛けています。たとえば骨組みだけつくって、そばに木切れを積んどくでしょ。子どもたちはそれらを建てかけて基地にして

三人三様のやりかたですが、「この活動が楽しくて仕方がない。こんな自然がすぐそばにある滋賀や草津は本当に良いところだとなってると思う」と口をそろえて言ってくれました。

好きな時にやりたいことをする。誰かの強制や指示でないこと。ちょっと人のためになること。適度な距離間の仲間づきあい。そして何より楽しい…

ここ、さくら坂保育園「ぼうけんむら」の三匹のおっさんは、たくさんの退職後のヒントを教えてくださいました。

初夏のこもれびが揺らめいて気持ちの良い里山です。

しまう。コナラやクヌギの原木に穴をあけておくとシイタケ菌を詰める。ツリーハウスもあえて階段をつくらない。子どもたちは端の杭や横の立木に足をかけたりして何とか登ろうとする。完璧に用意するのではなく、子どもたちが工夫する部分を残しておく。すると子どもたちも自分でつくった気になり達成感があるようです。すべて大人がやりきれない大切さをここの子どもたちから教えられます。

ここを卒園した孫には「わたしが園にいるうちにこの遊び場をつくってほしいかな」と言われてしまいました。「ぼうけんむら」づくりの活動は今3人ですが、園児のおじいちゃんを見かけると「一緒にしませんか」なんて声をかけています。



第17回

洪水と雨乞いと… 水と生きた歴史

～山寺・馬場～

ゆっくり草津 街道物語

草津川にはいくつの橋がかかっているのか…ふと、そんなことを考えながら砂原大橋・高樋橋・田中新橋・大黒大橋と橋を見ながら川をさかのぼっていきます。

工業団地の隣りには

いつのまにか川も見えなくなつた山寺川橋のたもとに洪水碑を見つけました。昭和28年9月の台風13号は3日間も雨が降り続き、草津川と美濃郷川を決壊させました。このとき流された太平橋と三ツ橋の橋げたが石碑として残され、12000戸もの家屋が浸水した記録を刻み、その凄まじさを今に伝えてくれています。

一路、山寺工業団地へと向かいます。日東電工(株)の向かいに小高い丘の「山の神公園」があります。雑木林に囲まれた公園の一角に手入れされたスペース、ここが山の神の祭場です。山仕事の無事と五穀豊穰・無病息災を願い、



山の神に祭られた素朴な神々

旧暦の1月7日には神酒・米・塩をお供えします。

「神木の松には、しめ縄がかけられ、根元には竹アミに載せた男神・女神がおられます。ふた股に分かれた木に顔が描かれた素朴な神々です。すぐ隣には工業団地。対照的

なこのギャップが山寺町の住民たちが守り続ける伝統と山に対する信仰心の篤さを否応なく感じさせます。

なんでも、この日は山仕事をしてはいけないうた。畑仕事に來たおばあちゃん同士が地べたに座り込んでおしゃべりです。緑の田んぼが広がるのどかな五月の風景です。

境内に三つの社

発願寺は南北朝時代、薬音寺の塔頭であった僧の正智が起こしたお寺で、江戸時代に名を発願寺とされました。本堂のへん額には「薬音山」とあり、金勝寺の寺領絵図には薬音山発願寺が描かれています。

発願寺から十二将神社までは歩いて行きます。みずみずしい青モミジの参道



青モミジの参道を上ると十二将神社が

登るとホッカリと開けた境内に三つのお社が建っています。本殿・弁財天・祇園社から成る十二将神社は栗東市の小槻大社の飛び地境内です。本殿には薬師如来を守護する十二神将がまつられています。出土した瓦から平安時代に創建された薬音寺がこの地にあったといわれ、元龜の兵火で焼失した跡にこの神社が建立されました。

鳥居を出て周囲を眺めると丘が続いていることがわかります。これは北谷古墳群跡で全部で11基ありました。以前にこのコーナーで追分を紹介したとき、古墳の上に建つ野上神社がありましたね。あの追分古墳に次いで古いものと言われています。北谷古墳から出土した鏡などは安土城考古学博物館に保管されています。



白壁・焼き杉板・蔵、なつかしいたたずまい

来た道を戻るように歩きます。竹林の向こうに見えるのは祥光寺。古く室町時代に創建された建物は焼けてしまいましたが江戸時代に黄檗宗祥光寺として建てられました。青地城の城主青地氏の菩提寺で、薬師堂にある本尊・薬師如来は草津市の文化財に指定されています。

雨が降るまで…祈る

さて、「ここから車で馬場町へ移動しましょう。川を左手に見ながら、カーブにさしかかると久邇宮橋という石橋があります。栗東市にある皇族ゆかりの所有林が検分のために昭和17年に新しく造られたことからこの名前が付いたと言われます。

橋のたもとには「右 田上ふどう道」「左 こんぜ道」「山寺村」「川下貝さつ」と刻まれた山寺の道標が埋もれるようにあります。

川沿いを走りながら馬場町のまち並みの外れにある八幡宮神社に到着です。うっそうとした木立の参道を境内へと進みます。応神天皇を祀った本殿・多度社・大將軍神社の3つの社があります。馬場の神様として昭和10年代まで「雨乞い」が行われていた記録が残っています。

農家にとって干ばつは、これ以上ない苦しみです。雨が降ることを願って三重県の多度神社へ参り、いただいた「黒い御幣」を八幡宮神社までの長い道のりを、なんと休むことなく持ち帰り、雨が降るまで鉦・太鼓を鳴らし続けて祈願したといわれるから驚きです。このとき、打ち鳴らし続けた太鼓は今も境内の倉に保存されています。

ひとたび大雨が降れば洪水や浸水で泣かされ続ける一方、干ばつとなれば雨乞いをしなければ生きていけなかったといつこの地の宿命、自然の脅威と恵みを心の底から感じてきた馬場町なのです。今も毎年1月14日に城田・上垣外・中垣外・仕掛田の四つの組で左義長が行われており、馬場町の人々の信仰の篤さと愛着を伝えてくれる八幡宮神

社でした。

幼稚園や学童保育の先がけ

さらに車で願信寺へ向かいます。風が田植えを終えた水面を揺らしています。あぜ道のタンポポ、大らかなたたずまいの家々、草津市でもなつかしい里山の風景が、ここ馬場町には残っています。小高い丘の竹林に「奥村但馬守館跡」と刻まれた石碑を見つけました。青地氏の家臣、奥村但馬守の屋敷があったと伝えられ、お家の衰退とともに屋敷内の守護神は八幡宮神社に移され、村の人々が代々守つてこられました。

馬場町を見渡せる高台に願信寺があります。室町時代に創建され、江戸時代に入り願信寺と称されました。「ようこそ、中の御本尊もご覧ください」と任職が扉を開けてくださいます。以前、馬場町に暮らすお年寄りから「農作業がまだ機械化がされていないころは、どの家でも田植えや稲刈りとなると家族総出です。忙しい大人たちが代わり、願信寺さんが今で言う幼稚園や学童保育のように子どもたちを集めて預かってくださいました」とのお話を聞きました。「みんなのお寺」として村の人々に



八幡神社の中には降るまで祈った太鼓が今も残る

愛されてきたのですね。

願信寺の近くに旧天領制札場跡があります。馬場は江戸時代、幕府の直轄地でした。札場は幕府からの高札を掲示した場所、いまは石組だけが残り往時をしのばせます。

馬場橋までもどってきました。橋のたもと付近は初夏ともなると、伸ばした手の指先に触れそうなくらい近くにホタルが飛び交う幻想的な世界が広がります。ホタルであれ、里山であれ、誰もが心に染み入る日本人の原風景ですね。工業団地に隣接する山寺と馬場で、自然とともに人の営みが脈々と営まれてきたことを感じさせてくれるまち歩きができました。

俳句散歩 夏

今年は暑くなくても節電のためにクーラのスイッチを入れるのを躊躇しがちです。今回は、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。…」で始まる芭蕉の紀行文「奥の細道」の中から、季節にちなんだ俳句を読んで、心頭滅却し、一時暑さを忘れましょう。

夏草や

つわもの

兵どもが 夢の跡

芭蕉

芭蕉は元禄2年（1689年）の春に江戸を発ち、「奥の細道」の旅に出ました。新暦の6月半ばに、現在の仙台と塩釜の間にある、多賀城跡の碑、「垂の碑（いしづみ）」を訪れこの句を詠んだと、随行した曾良が書き残しています。この碑は栄華を誇った藤原一族が天平宝字6年（762年）に建立したと推定されています。

芭蕉はこの地を訪れ、碑は苔むして文字は判読し難いが千年の昔のおもかげをそのまま残しているのを見て感動し、旅の苦勞を忘れ、存命のよろこびをかみしめ、旅して来た甲斐があつたと涙を流しました。

奥の細道の原文ではつぎの文章に続いて、この句が出てきます。

『偕（なご）も義臣すべつて此の城にこもり、功名一時の叢（くさむら）となる。』

国破れて山河あり、
城春にして草青みたりと、笠打ち敷きて、
時のうつるまで泪を落とし侍りぬ』

句の意味は、今は夏草がぼうぼうと生い茂っているが、千年前には藤原一族や義経の一族が栄華の夢に耽ったり、功名を立てようと競っていたが、今はただ夏草がぼうぼうと生い茂るばかりで、すべてがむなししく一場の夢となっていました。



五月雨の

降りのかしてや 光堂

芭蕉

芭蕉は更に北上して、平泉の中尊寺を訪れました。栄華を誇った藤原一族が義経をかくまったことを口実に、鎌倉幕府によって滅ぼされたことを芭蕉は大変哀れんでいました。

折からの五月雨の降る中、藤原三代の棺を納めた光堂を参拝し、次のように描写しています。

『光堂は三代の棺を納め、二尊の仏を安置す。
七宝散りうせて、珠の扉（とほそ） 風にやぶれ、
金の柱霜雪に朽て、既類廃空虚の叢と成べきを、
四面新に囲て、雲を覆て風雨を凌。』

暫時（しばらく）千歳の記念（かたみ）とはなれり。』

句の意味は、人が造ったものをすべて朽ち果てさせる五月雨が光堂だけには降らず、千年も前から今に至るまで昔ながらの華やかな金色の輝きをのこしている。

さて、皆さんは何に感動し、
何に哀れを覚えるのでしょうか？

この夏を「火も又涼し」と覚
える何かを見つけてください。



*類廃（たいはい）…壊れ荒れること。

鳥の眼とまちの芽

第1回 オオヨシキリ

5月の中ごろ、鳥仲間と烏丸半島周辺に鳥見にでかけました。新緑の美しい時期、田んぼでは小学生が田植え体験中。のどかな～とヨシ群落に足を向けると、にぎやかな、というよりけたたましい鳥のさえずりが聞こえてきます。

オオヨシキリです。別名ギョウギョウシ（行々子・仰々子）。名前のとおりギョギョシ、ギョギョシと大きな声で鳴き続け、かまびすしいことこの上ない鳥です。（かわいいけど）

ヨシの莖に止まってテリトリーを主張するオオヨシキリは、スズメよりひとまわり大きい灰褐色の地味な体色の鳥ですが、嘴をいっぱい開けてさえずっているその口の中は真っ赤で、鳴き続けて血の色にそまったかと思まごうばかりです。

行々子 口から先に 生まれたか 一茶

ところで、オオヨシキリの名はいづこから？ヨシを割いて中の虫を食べるところからという説がありますが、鳥仲間のベテランバードウォッチャーは、「鳴き声がヨシを切る音に似てるからちゃうか」と

大空を自由に飛ぶ鳥たち…「草津ではめっきり鳥を見なくなった」というアナタ、いえいえよ～く見渡してください、耳を澄ましてください。聞こえてきませんか、かわいいさえずりが。注意してみると意外と草津でも色々な鳥たちを見つけることができます。

今回から4回シリーズでお届けする「鳥の眼とまちの芽」は、草津で見られる鳥たちと、鳥たちの視線を借りて草津の魅力に迫ります。



写真 河合恵美子

言います。そう聞けばなんだか大忙しでヨシを刈っている人の姿も目に浮かんできます。

かつては農作業の傍らに、家の庭先に、特に探さずとも多様な生き物がいたことでしょう。そしてそれらを観察することから私たちの祖先は自然を学び、自然を尊ぶ心を育ててきたのではないのでしょうか。

烏丸半島と言えばハスの群生地が有名で、観光資源としてスポットライトがあたっているようですが、野鳥をはじめ多様な生き物の暮らすヨシ帯こそ大切に守っていききたいものです。



絵と字

中村明雄

おかえりなさい！

ずっとあなたを待ってました



イラスト 大村 恵

熊谷栄三郎の
徒然草津
つれづれくさつ

第7回
草津のパワースポット

熊谷栄三郎

金環日食の観測(ごっこ)、東京スカイツリーの開業騒動、放鳥トキ親子の空中散歩…。

初夏、そんなニューススでにぎわった。空高い所での話には世間の興味が集まるらしい。「では、もしスカイツリーのてっぺんにトキが巣をかけたら、どんな大騒ぎになるか」と酒席でふざけたら、「あんた、空とか宇宙にマジメな興味はないのん?」と聞かれた。

ある、ある。世の中で空ほど大切なものはない、とさえ思っている。その証拠に、広島刑務所を脱走した人物が四月の法廷で「空が見たかったから」と話したという夕刊記事の一行を、私は見逃さなかった。

広い空の下では、なぜか心が抑圧から開放される。自身、何回も経験した。だから人や町が健全であるには、頭上に広く開けた空がある方がいいと信じている。うれしいことに、そんな空が草津にはまだある。

たとえば、市域を東西に走る淡海くさつ通り。上笠地区のはずれで伊佐々川を渡る橋の上の流側と下流側に、休憩所がある。ドーム型の屋根付きで、日射や雨もしのげる。

昨秋から、ここへ足しげく通っている。

とくに夕日が期待できる日は、上流側の休憩所で早くから待機する。眺望がよい。西方、琵琶湖の彼方には宗教の山・比叡の全容や比良連山。振り向けば三上山や金勝山。仰げば広い空。

さてこの季節なら、その空を渡り切った夕日が比叡の峰に沈む。神々しい。西空に薄雲があれば、それが濃淡さまざまな茜色に染まる。見ているうち、涙が出ることもある。

先日ふと、橋のたもとのヨモギを払ったら橋名板が現れた。「大日大橋」とあった。聞けば昔、付近に大日堂があったと。大いなる日輪、つまりは宇宙を意味する大日如来をこの地で人々は拜んでいたのだ。今ここは、私のパワー・スポット。草津の空の下、こんな所がほかに数々あるにちがいない。



編集後記

▼原発はいやだ、暑さもいやだ、どうあるべきかが問題だ(橋詰) ▼今年は草津の街中や葉山川にホタルを見に行ったらほか、駒井沢のホタルについてのエッセイに接するなどホタルの話題がたくさん。ホタルがもっと増えますように(中井) ▼団塊世代の社会参加、心配する事無く、青春を謳歌されているようにお見受けしました。私もあやかりたい?いや、編集ボランティアの皆さんもそうではないかと思いました。

(大石) ▼「定年退職したけれど、年金生活には程遠い」この矛盾はなかなか解けそうになく、デビューまでちょっとお待ちください(大條) ▼自治会・ボランティア、心が元気な方が大活躍!刺激を受けて仲間が増えるといいなあ(大村) ▼有川浩さんの小説「三匹のおっさん」は痛快。暑い夏もスッキリ過ごせます。オススメ(荒川) ▼たくさんのおっさんたちに出会いました。一見、そんなこと?と思うことに仲間たちと大マジメに取り組むおっさんたちの姿は、どこか愛らしくもあったりして。何よりどの人も愉快で楽しげで、カッコいい!うん、おっさんになるのも悪くない。いやいやもう立派なおっさんですが(茶木)

人と街の未来をつくるカレッジ

2期生募集!

あなたの街はどんな街ですか?

今年も「人と街の未来をつくるカレッジ」が始まりました。様々な角度から、あなたの街を見てみましょう。きっとあなたの街を好きになりますよ。

12月まで月2回のペースで土曜午前開催中(まちづくりセンター)。詳しくは下記まで。あなたの街のこと、教えてください。

そろそろ、この街の話をしようじゃないか。

市民編集ボランティア募集!

コミュニティくさつ編集部

(公財)草津市コミュニティ事業団内

〒525-0037

滋賀県草津市西大路町9-6(まちづくりセンター内)

電話 (077) 565-0477

ファックス (077) 562-9340

メール com-com@mx.biwa.ne.jp

URL http://www.kusatsu.or.jp/



再生紙使用

~地球にやさしいまちづくり~